

セルバンテス作

『新訳 ドン・キホーテ』

(牛島信明訳 岩波書店)

古今の芸術家たちが、『ドン・キホーテ』から味わってきた快楽を共有すること。リヒャルト・シュトラウスの交響詩はもとより、エリック・ブライトフのコンセプチュアリズム絵画、ボリス・エイフマンの現代バレエ等に用いられた素材について、その現代的な意味を咀嚼しつつ、『ドン・キホーテ』のテキストに向かいあうこと。しかし多くの人は、自らの体験に照らして、こう考えるはずだ。『ドン・キホーテ』がいかに間テクスト的な豊穡さに満ちているとはいえ、二〇世紀末の現代にその意味を読みかえる作業など不可能な話だと。そもそも読み通せるはずがない。

牛島信明訳『ドン・キホーテ』の登場によって明らかにになったことが一つある。『ドン・キホーテ』を「読み通せない」事情とは、時代にふさわしい翻訳を持ちえなかったその一事に尽きるということだ。私自身、これが三度目のトライだが、手応えは十分すぎるほどある。もったもここで、翻訳の質ばかりを取りざたするわけにはいかない。過去の文学青年たちが米川訳ドストエフスキーを読みこなししてきたエネル

ギーを思えば、訳の質などはむしろ二の次であり、問題はむしろ、時代の文化そのものの質にあったと見るべきなのだ。一九七〇年代前後の学生に、滑稽なるものをめぐって頭を働かせる余裕などなければ、『滑稽』のメスでおのれのナルシズムを傷つける勇気も持ちえようがなかった。かくいう私も、ドストエフスキーの悲劇的パトスに魅入られた一人であったから、『白痴』のムイシキン公爵の「しんじつ美しい人間」像に、イエス・キリストとドン・キホーテが重ね合わされた理由にも、『ドン・キホーテ』を「憂鬱な小説」とした作家の真意にも総じて無関心だった。翻訳についていうなら、序文の書き出し「閑暇な読者よ、予がこの書物を、己が知能の子として……」からして、読者の遠からぬ挫折を約束するような時代錯誤的アルカイズムだった。こうして三〇年、『ドン・キホーテ』は私にとって、つねに鬼門の書でありつづけてきたというわけだ。

では、当のセルバンテスを振り返ってみよう。ロマンティックな想像力と滑稽さ／アイロニーの同居という特質は、すでに作家として自立した時点で彼が授かった天与の才であったのか。否。セルバンテスもまた人後に落ちず、ロマンティックな想像力に沈潜した時期があった。『ガラテア』と呼ばれる、羊飼いたちの純愛を描い

た初期長編がそれだが、過去の文学に「ノン」を突きつけた『ドン・キホーテ』とおよそ異なる、一元的永遠性のヴィジョンに、彼は、終生、憧れつづけたという。その意味からすると、齢五〇半ばを過ぎて書かれた『ドン・キホーテ』とは、本来、成熟した読者のみが受け入れうる大人の文学と考えてしかるべきなのかもしれない。

このことは、日本のセルバンテス学に一時代を築いた『反||ドンキホーテ論』で牛島氏が書いていることとも通底する。彼はその冒頭で、この小説を「とても読めないしろもの」にしている理由を四つ挙げている。一、騎士道物語のみならず、当時のもろもろの文学ジャンルをも取り込んだ『ドン・キホーテ』のパロディとしての滑稽みが現代の読者には追経験できないこと、二、小説の舞台そのもののローカル性、三、本筋を寸断するようにして挿入されるエピソード群、四、『ドン・キホーテ』に反映された作家セルバンテス自身の曖昧さなしい韜晦性。そして牛島氏は、『ドン・キホーテ』が日本で受け入れられない本質的な理由として、読者の心にストレートなたちで笑いを呼び起こせない作家自身の「多義的な文体」を挙げている。ここには、「滑稽なるもの」に対する牛島氏なりの見方が反映している。

では、哄笑を喚起するテクストは、果たして「一義的」でしかありえないのか。『反ドン・キホーテ論』は、ここから、セルバンテスの「多義的な」文体におけるアイロニーとユーモアの多様な機能性の探求へと向かうことになった。

興味深いことに、今回の新訳は、セルバンテスの「多義的」文体（ないしは語り）こそが、哄笑を呼び起こすまことの装置であること、同時にこの小説を支える最大の魅力であることを証明している。であるなら、この翻訳はもはや翻訳というより、いわばその延長上にある「批評」「研究」ないし「実践」と見なしうるものになる。なにしろ、『反ドン・キホーテ論』の次に著者が掲げた課題とは、曖昧さと韜晦性の表層から、滑稽小説としての『ドン・キホーテ』の醍醐味をどう甦らせるかにあったのだから。

会田訳を引用した部分は次のように訳されている。「おひまな読者よ。わたしの知能が生み出した息子ともいうべきこの書が……」。この一行がはらむ多義的な軽みこそが、新訳全体をつらぬく基本的なコンセプトとなっている。こうして、文体の様々なレベルに及ぶ微妙な色分けをとおして、「愁い顔の騎士」の分裂した内面がじつにくっきりと客体化されていく。同時に、時として自らの主人公にのりうつらんとする作者自身の道化的身ぶりが、リズムと強度が堪えう

るぎりぎりの精巧さで浮き彫りにされていく。ロシナンテの緩慢な歩みにあわせ、私が無事シエラ・モレーナ山まで辿りつけたのも、じつはこの「多義的」かつしなやかな訳文の魅力に引き込まれたからに他ならない。風車を悪の巨人と、漕役刑の囚人を庄政の生贄とみなし、惨憺たる仕打ちに出会うドン・キホーテが、シエラ・モレーナ山中で出会った「檻樓の騎士」とは、彼自身のもう一つの自我でなくて何であろう。同時にそれは、セルバンテス自身の中世的ロマンティシズムへの愛惜と、その不可能性の意識を暗示する。

最近、古典見直しのムードが出版界に少なからずある。池内紀による新訳『ファウスト』もその一つだ。面白いことに、この池内紀が、挫折のくり返しの果てに読了したのが、牛島訳による少年文庫版の『ドンキホーテ』だったという。この事実は、『ドン・キホーテ』の翻訳があるべき興味深い一面を示唆してくれる。池内氏の熱中を可能にしたのは、少年文庫が本来もつべきリズムと明晰さだった。つまり、ここでも経験の積み上げが生きていたということだ。

ドストエフスキーは晩年、『ドン・キホーテ』についてこう書いた。「天才が創造したあらゆるもののなかで、もつとも偉大で、もつとも悲しい書物である」。『白痴』を書いたドストエフス

キーとはほぼ同じ年齢で『ドン・キホーテ』が読める幸せを噛みしめたいと思う。待った甲斐があったというより、この本との出会いと相性の良さはどこか謎めいていて、こんな予感を私に抱かせる。今回の新訳は、日本の翻訳文化の成熟のしるす一つの指標となるのではないか。成熟した大人の小説が、いま、かつてゴーストキーが空想していたような意味での「世界文学」として、少年少女たちの心にも甦えるのではないか。ドストエフスキーから遅れること三〇年。むろん、この場合、このように書く私自身もその少年の一人にはちがいない。

（亀山郁夫）

